RUSSIAN MATINEE

【主旨】

本計画は自転車とランチカーという移動手段に着目した「旧ロシア領事館」の増改築案である。

「旧ロシア領事館」は函館市西部地区に建つ。この地域は東西で雰囲気がかなり異なるが、東側の元町は歴史的建造物が多く華やかな一方、西側は「外人墓地」「函館どつく」など、渋い港町だ。「旧ロシア領事館」はこの西側に位置するが、そのアクセスの悪さ故観光資源として埋もれてきた。

そこで、このアクセスの問題を解決するために自転車を活用する。函館の観光地は 5km 圏内に点在するので距離の点から自転車は有効な移動手段であるし、西部地区東西 2km の移動も容易だ。元町は坂の多い場所だが、函館市ではオリンピックに向けて電動自転車「はこりん」の運用を開始しており、少々の坂は問題ない。自転車の活用は東西を融合すると同時に 100 年先の省エネルギー都市を志向するものである。

さらなる活用を考えていきたいのがランチカーである。「箱館移動販売促進連合会」が道南のまちおこしを図っているなど、函館への親和性は高い。「旧ロシア領事館」を含めて元町全体にランチカーを回せば、函館の味も観光客に楽しんでもらえる。高台の「旧ロシア領事館」はレストランとして最上の場所になるだろう。将来、ランチカーで開拓された経路は、地域の高齢者ニーズに応じる「高齢者向け宅配サービス」の経路として利用することも可能になる。100 年先の福祉都市 というわけだ。

このような移動手段を「旧ロシア領事館」の建築的要素へ導入するために、敷地内に「みち」を配置した。この「みち」は旧ロシア領事館を囲むように配置され、MATINEE を想起させる。「みち」に沿って宝石を模した小屋やスペースが配置され、敷地内を散策しつつ「旧ロシア領事館」を楽しめる。屋台骨がゆるいでは 100 年先はおぼつかないから、歴史的建造物を損なわない構造補強も提案している。

自転車・ランチカーの活用により、函館は省エネルギー・福祉都市へと成長するだろう。函館市西部地区西側の発展に着目したこの「旧ロシア領事館」の増改築案は、そのさきがけである。(867 字)

※　MATINEE（マチネー）：鎖骨の下あたりにくる長さのネックレス

直径 5.0km の円

【函館の広域分析】

函館の観光地の主要な部分は、左図のようにおよそ 5km 圏内にある。西部地区には「伝統的建造物群保存地区」が指定されていてるが、西部地域の中でも東側（元町）に集中する。

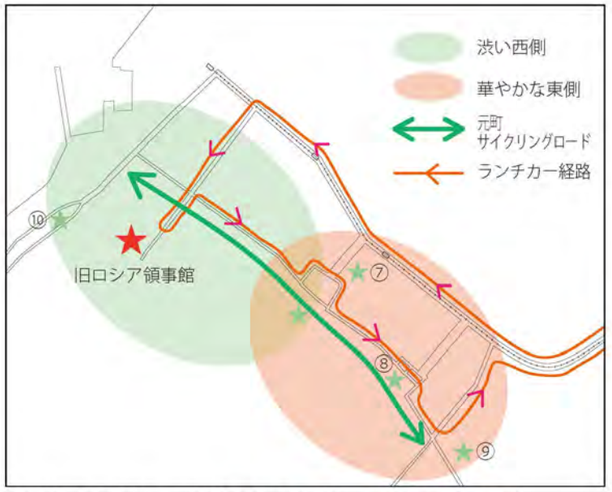
函館市西部地区
「旧ロシア領事館」のある地域

西部地区東側元町にある函館ハリストス聖教会。街路などの周辺環境も整備され、華やかな雰囲気がある。

西部地区西側船見町にある外人墓地。静謐で独特な雰囲気を有する。アクセスはあまり良くないので、ひと気は少ない。

函館市西部地区名所 MAP　　伝統的建造物群保存地区

旧ロシア領事館は坂の上にありロケーションはよいが、中心からは離れる。



元町サイクリングロード計画とランチカーの巡回経路の提案

元町東西をサイクリングロードが繋ぎ、ランチカーが巡回することで東西は一体的に発展することが期待される。

元町サイクリングロードのイメージ（コラージュ）

サイクリングロードと車道は兼用とするが、自転車も車も狭い道をのんびりと移動するよう速度制限する。

【新しい増改築棟のイメージ】

① ファサード、敷地の雰囲気から想定される LADY の面持

「旧ロシア領事館」ファサード

「旧函館区公会堂」ファサード

「旧ロシア領事館」の近隣には歴史的建造物がないので、函館市西部地区西側に人を引き付ける中心的な役割があると思われる。この地域がより魅力的なものとなるためにどのような建築的手法で増改築するべきだろうか。まず、左で述べたようにアクセスを自転車とランチカー中心とするために敷地内に自転車、車、そして人が歩く「みち」が必要と考えた。「みち」も単なる外構ではなく、「旧ロシア領事館」を引き立てつつその存在感をアピールするもの、ネックレスのようなイメージがよいと思われた。

「旧ロシア領事館」を眺めていると、緑豊かな庭にひっそり佇む女性的な雰囲気を持っているように思われる。アメリカのコロニアル風で堂々たる面持の「旧函館市公会堂」を東の "GENTLMAN" と銘打つならば、アールデコの繊細な装飾美を有するこの旧ロシア領事館は西の "LADY" といえる。そこで、前述の「みち」に懸けて、いまは引き込み思案のこの LADY に首飾り（MATINEE）を送ることとした。

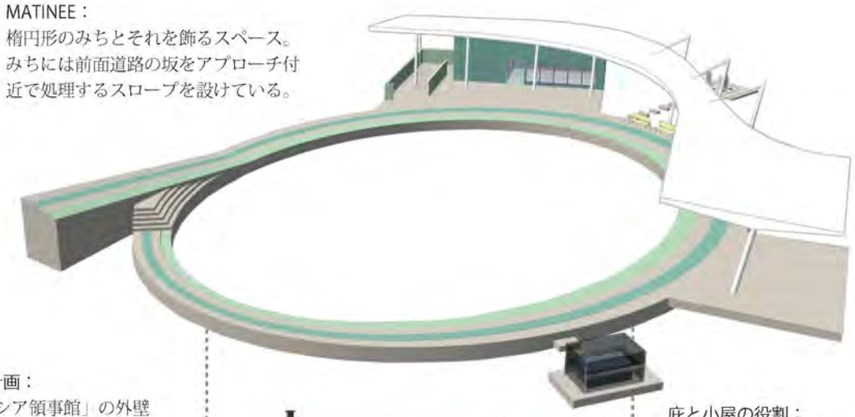
新たな装いのこの LADY は西部地区西側の名所として、そして函館の「伝統的建造物保存地区」をさらに魅力的なものに変えてくれるではないかと考えている。

② 建築的手法への昇華

MATINEE with RUSSIAN LADY

左のスケッチは MATINEE をかけたロシア女性である。このモチーフのように、「旧ロシア領事館」の建物の周りを一周するみち（チェーン）と、みちに設置されたイベントスペース（宝石）が「旧ロシア領事館」という貴婦人を演出する。

MATINEE：
楕円形のみちとそれを飾るスペース。
みちには前面道路の坂をアプローチ付近で処理するスロープを設けている。

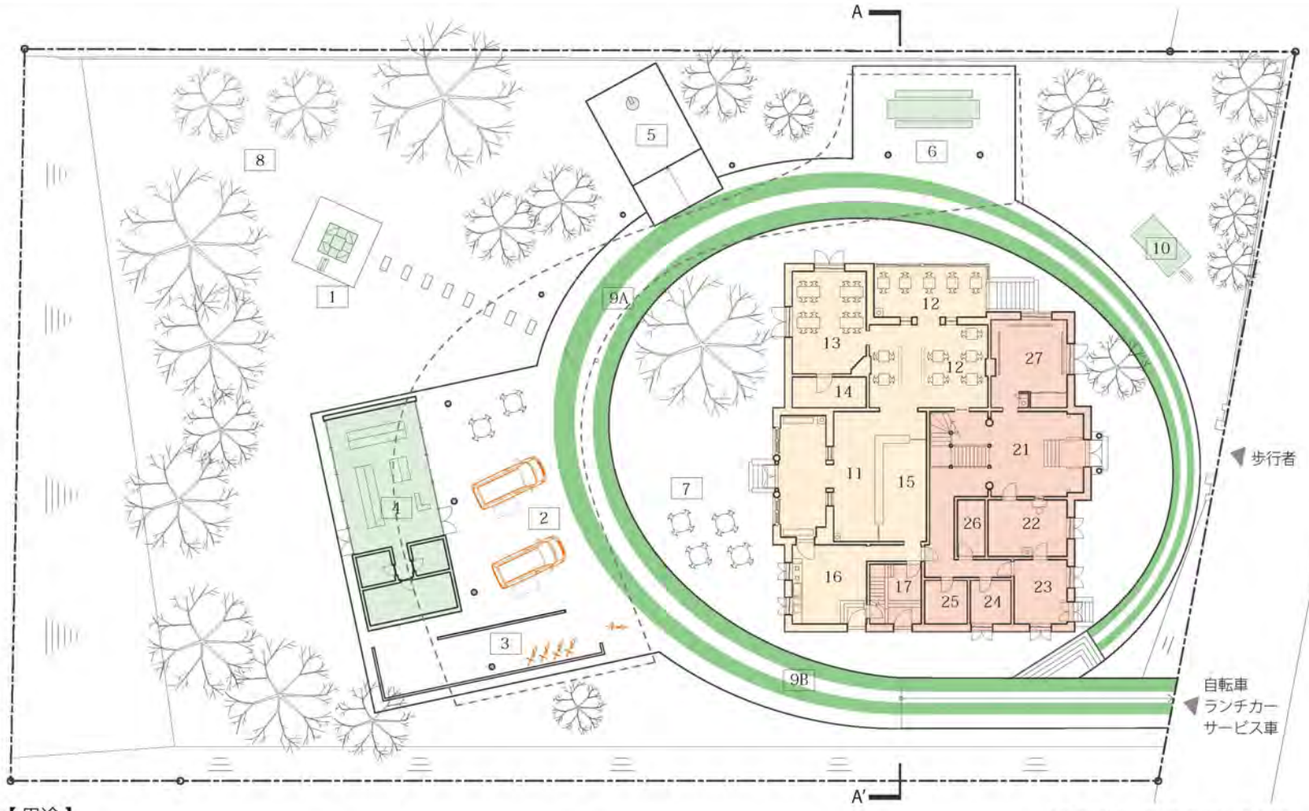


色彩計画：
「旧ロシア領事館」の外壁は煉瓦で、屋根は銅板の緑青である。煉瓦の赤茶とよく映えるように、増築部のみちと小屋には緑を多用し、「旧ロシア領事館」を際立たせた。膜屋根は透過性の高い白を用いることで、明るさをもたらす。

赤茶　白　緑

庇と小屋の役割：
膜構造による庇と小屋はみち沿いに設けられたイベントスペースとなり、みちを介して「旧ロシア領事館」に間を形成する。

「旧ロシア領事館」の改修：
現在の増築棟は用途の変更に応じて撤去する。それに応じて外観の復元を行う。



配置図兼一階平面図　1:400

【用途】

増築棟　1階
1 ：Goshkevich像
2 ：ランチカー販売スペース
3 ：駐輪場
4 ：函館名産店（小屋）
5 ：展望台
6 ：休憩所
7 ：屋外食事スペース
8 ：鎮座の森
9A ：みち（歩道）
9B ：みち（自転車・車道）
10：ボイラー（オブジェ）

旧ロシア領事館　1階
11：レストランホール
12：レストラン一般席
13：レストラン予約席
14：レストラン用倉庫
15：レストラン受付
16：レストラン厨房
17：職員用通用口（共通）
21：美術館ホール
22：美術館受付
23：美術館事務室
24：男子便所（共通）
25：女子便所（共通）
26：美術館倉庫
27：市民の自由展示

旧ロシア領事館　2階
28：企画展示スペース
29：展示用倉庫
30：通路

〈用途凡例〉
みちの小屋・工作物
レストラン
美術館

二階平面図　1:400

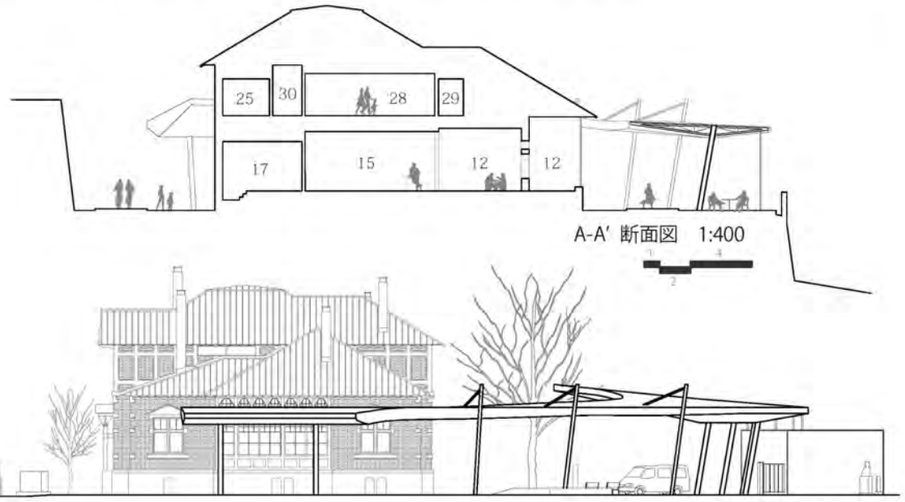
【MATINEE＝「みち」によるアプローチ＆イベント】

「みち」を介したA～Iのアプローチにより各スペースがつながる。「旧ロシア領事館」を一周しつつ、下記アイテムが配置されたイベントスペースを散策できる。各シーンのパースは本紙「3」を参照のこと。

〈アプローチ〉
A：美術館へ
B：みち歩行者アプローチ
C：レストランへ
D：屋外食事スペースへ Takeout
E：自転車アプローチ
F：ランチカーアプローチ
G：サービスアプローチ
H：Goshkevich 像アプローチ
I：スペースをつなぐみち

〈イベント〉
イ：旧ロシア領事館で美術鑑賞
ロ：函館名産店で買い物
ハ：ランチカーで食事
ニ：休憩所でおしゃべり
ホ：展望台に感動
ヘ：Goshkevich 像を鑑賞
ト：屋外食事スペースで食事
チ：鎮座の森を散策
（鎮座の森は現在ある植栽を移植して銅像を囲むように形成する）
リ：地下のボイラーを見学
（ガラスで囲いオブジェ展示する）

ハ：アクセス用はこりん　ハ：ランチカー　ホ：望遠鏡　ヘ：Goshkevich 像　リ：ボイラー



A-A′ 断面図　1:400

北立面図　1:400

【増築部分建築概要】

1）構造規模　庇部：鉄骨造平屋　小屋：木造平屋
2）仕上（庇部）床：砕石＠100＋土間コンクリート＠150　カラータイル貼り
屋根・軒天：25％透光性四フッ化エチレン樹脂コーティング膜
（小屋）床：コンクリート厚 150mm 磨き仕上げ
外壁：珪砂入漆喰仕上（カラー仕上）
内壁・天井：練付合板 18mm
屋根：耐水合板＋ラスモルタル押え 30mm
3）設備　薪ストーブを設置

4）面積表　単位：㎡

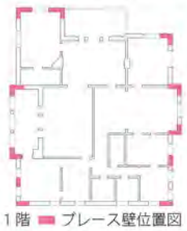
	既存	増築	建築面積
	428.11	419.55	847.66
	既存	増築	延床面積
1F	428.11	419.55	1111.85
2F	264.19	—	

5）工事費概算　単位：万円

	既存改修	増築	外構	解体	計
1F	700	2200	600	800	4800
2F	500	—			

※ 庇は建築的要素が発生するために床面積に含む
※ 概算の既存改修には耐震改修も含む

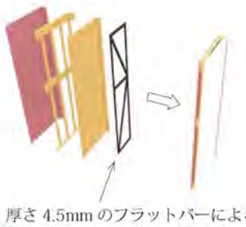
【「旧ロシア領事館」部分耐震補強　＝　揺れの制御】



1階 ■ ブレース壁位置図

2階 ■ ブレース壁位置図
■ 畳→ 構造合板

ブレース壁システム図



厚さ 4.5mm のフラットバーによる鉄骨ブレース。① 薄い ② 合板にエポキシ樹脂で接着させボルトなどが突出しない、という2点でインテリアに目立たないディテール。

〈ブレース壁追加による層間変形角〉
煉瓦造：1／300 ⟹ 変形角一致
木造　：1／150　　1／300

木骨煉瓦造であるため、100年維持するために耐震補強が必須と思われる。木骨煉瓦造の弱点は木造の剛性が低いため煉瓦が追従できず崩れる点にある。

本件では、木造の補強として左図のように建物4隅の壁にバランスよく「木造合板＋フラットバー鉄骨ブレース壁」を配置し、木造の変形を抑えて煉瓦造と一体させることで建物の揺れを制御することとした。また、用途を美術館に変えることで2階の床には構造合板を加え剛床効果を高めている。外観を損なうことのない改修として提案する。

【増築部庇構造システム】

フレームA・Bは開放的な庇形状とした。
テンションロッドで元端側を引っ張る。

イベントスペースを覆う構造体は鉄骨フレーム＋膜屋根とした。モチーフとしては、港町であることから、膜は水夫のスカーフを、鉄骨フレームは船のマストをイメージしている。

鉄骨フレームは地震力を負担する力感的なフレームA・Bと地震力から解放された柱C群からなる。これは、柱C群の位置は函館の海を見下ろしやすいため、軽快な部材配置を求めたためである。フレームA・Bは架構端部にあるため地震力には有効に作用し、構造的にも合理的である。

① 前面道路からの視点

② スロープを下った視点

③ 旧ロシア領事館への視点

④ Goshkevich 像への視点

⑤ 展望台とみちへの視点

⑥ 休憩所への視点

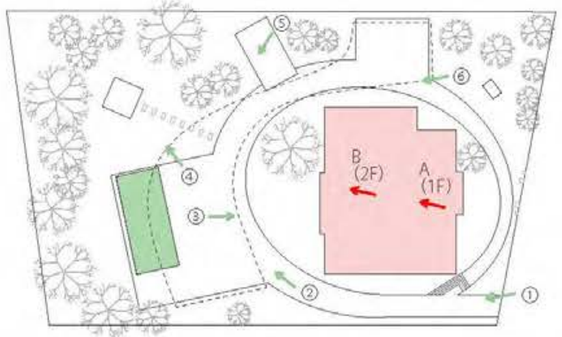
【周辺環境と敷地俯瞰図】

緑に囲まれた豊かな空間。植栽は定期的に間伐いて薪として用いる。

周辺に圧迫感のないよう建築面積は余裕を持った計画としている。

【ショットパースプロット図】

「旧ロシア領事館」を取り囲むように各種スペースがあるので、ぐるっと回って体感することが可能。



【既存改修によるインテリア】

A： 1F の美術館エントランスホールは照明により吹抜けを演出する。

B： 2F の畳部屋は床を構造用合板＋板張とし展示スペースへ変更。

【ショットパースの説明】

①前面道路からの視点 現在は植栽でファサードが覆われ、その表情が掴みにくい。植栽を移植することと、坂であがっていく部分の塀をガラスとし、建築としての存在感を高めることとした。	② スロープを下った視点 スロープを下ると駐輪場とランチカー販売スペースが見えてくる。庇下はゆったりとしたスペースで屋外の緑を楽しみつつ食事や団らんができる。	③ 旧ロシア領事館への視点 庇の陰から「旧ロシア領事館」を眺める。改修した建物からこぼれる内部のライティングを鑑賞できる場所になる。楕円状のみちも見渡せ、人の往来も楽しめる。
④ Goshkevich 像への視点 Goshkevich 像は、みちの奥、敷地の植栽を集めた鎮座の森の中央にひっそりと佇む。みちから飛び石で像の前までアクセスし、その印象をより深める構成としている。	⑤ 展望台とみちへの視点 函館湾を望むもっともよいロケーションに望遠鏡付きの展望台スペースを配置した。元町、函館湾、函館どつくなど、函館山とは違う高度でじっくりと眺められる。	⑥休憩所への視点 展望台同様、休憩所からも函館湾への眺望は開けている。ここにはテーブルとベンチを用意し、景色を見ながら庇の下で団らんできる。